

吹田市立博物館

博物館だより

NO.16

SUITA CITY MUSEUM



聖徳太子絵伝（第二幅 部分）（四天王寺蔵）

平成13年度特別展

「東寺領垂水庄 —悪党の時代—」

平成13年4月28日(土)～6月3日(日)

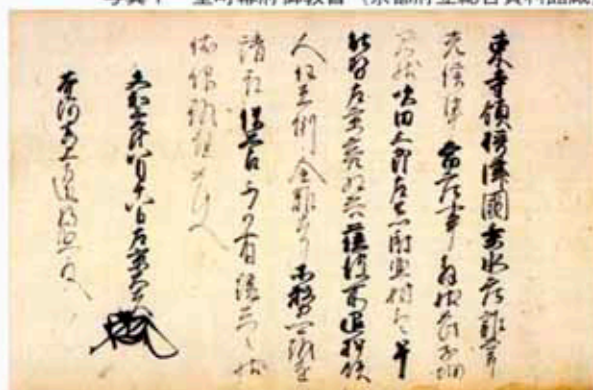
垂水庄は、現在の吹田市江坂町・豊津町・江の木町・芳野町から豊中市小曾根にかけて所在した荘園です。この辺りは、低湿地帯で耕作条件が厳しいところですが、京都に近く、水運に恵まれた地の利から早くから開発が進んでいました。この垂水庄は、布施内親王（桓武天皇第五皇女）家が開墾して開発したところを、弘仁3年（812）、嵯峨天皇の命令により内親王の遺領が東寺（教王護国寺）に寄進され、東寺領荘園となりました。荘園というのは、奈良時代から戦国時代における田地を主体とした私的所有地のことです。その所有者が古代国家において権力を握っていた貴族や大寺社などであったところに特徴があります。荘園所有者は、本家や領家などと呼ばれ、多くは京やその周辺にいて、現地に荘官を派遣し、現地の土地や農民の管理をさせて、年貢や雑役を徴収させていました。また、垂水庄の北部から西部に隣接する千里丘陵一帯には垂水牧がありました。これは、元来警護や交通運輸等のための牛馬を飼育する牧場でしたが、11世紀後半ごろには、摂関家を領主として、住民は垂水牧内の原野を開拓し、垂水牧は耕地化が進み荘園へと変化していきました。この二つの荘園は、くっきりとその境界が分かれていたわけではなく、垂水牧の農民が垂水庄へ出作しており、垂水庄の農民との間で、土地の境界や年貢の納入、雑役の負担をめぐるたびたび争いがおきていました。

次に、今回の展示の中心となる鎌倉時代末期から室町時代前期の垂水庄に目を向けてみましょう。鎌倉時代末ごろから、悪党と呼ばれる集団があらわれました。悪党とはわるものやその集団を意味しますが、この時代にあらわれた悪党というのは単なる悪行をするものという意味だけでなく、領主や幕府などの支配に反発し、抵抗したもののことを指します。この悪党は、中世前期の播磨国の地誌である「峯相記」によると、所々の乱妨や浦々で略奪などを行い、そのいでたちは「異類異形」で人間の姿とも思えないと記述され

ています。「聖徳太子絵伝」（表紙写真）の場面は、支配者からの視線として、まさにそうした悪党の放火や略奪・乱妨の様子を描いています。この悪党には、山僧や神人・凡下（一般庶民）・西国御家人・荘官・有力農民など、あらゆる階層のものが含まれていました。延慶元年（1308）ごろ、東寺の直務（直接）支配の阻止を図る下司の播磨局と下司代の唯勝を支援して、土室氏とともに垂水庄に乱入した芥河氏も、荘園領主東寺にとっては悪党といえる存在でした。

次に、東寺と下司、さらに垂水庄へ乱入した芥河氏との関係をみてみましょう。在地（現地）を支配する下司職については鎌倉時代初めごろから問題を抱えていました。それは、源平合戦のおり、東寺から派遣され垂水庄の現地荘官であった下司重経が、平氏方であったため源氏の追討使によって追放され、東寺は垂水庄の在地支配権を手放し、元久2年（1204）、采女出雲局が鎌倉幕府によって下司に任命されてからは、東寺と直接関係

写真1 室町幕府御教書（京都府立総合資料館蔵）



室町幕府御教書

東寺領摂津国垂水庄雑掌

光信申当庄事、解状如此、子細

見状、吹田三郎左衛門尉濫妨云々、早

能勢左京亮相共位被所、退押領

人、任先例全難掌所務、可執進

請取、使節不可有緩急之状、

依仰執達如件、

文和三年八月十八日 左京大夫(花押)

芥河貞上左近将監殿



写真2 足利義満像（鹿苑寺蔵）

のない出雲局が派遣した下司代が莊園の現地で管理を行うようになりました。このように、出雲局方の手に下司職が渡って以来、東寺は下司職を取戻すことに努め、たびたび両者の間で争いがおきていました。南北朝の内乱以降、下司職は東寺の手に移っていました。文和3年（1354）8月、吹田氏が垂水庄を押領する事件がおきると、室町幕府は芥河真上氏と能勢氏に、吹田氏の押領を停止するよう命じました（写真1）。その1ヶ月後、芥河真上氏の一族である芥河真継は將軍足利尊氏より勲功の賞として垂水庄の下司職を給付されたのです。このとき幕府が給付したのは、戦費調達のため一年を限り、本所領や国衙領の年貢の半分を勲功のあった武士に与えた半済であったと思われます。ところが、貞継は、これを半済給付とは考えず出雲局以来の下司職の継承であるにとらえ、押領を停止させたはずの吹田氏を誘って在地支配に乗出し、その支配の拡大につとめて押領を続けました。延文2年（1357）には吹田氏と芥河氏の乱妨を停止する命令が出されましたが、両氏は恩賞として賜った地であるとして垂水庄への乱入をくり返しました。南北朝内乱期に下司播磨局を支援したり、出雲局以来の下司職に関する

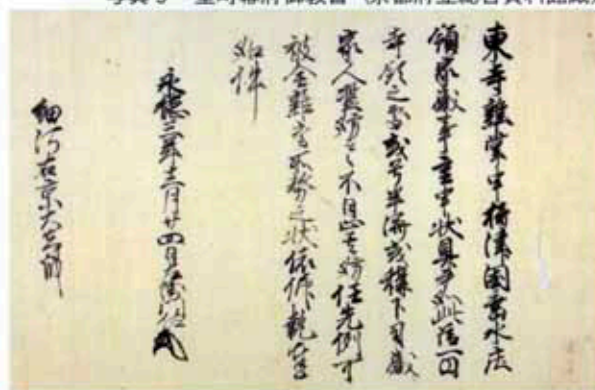
証文を手に入れるなど、貞継には、出雲局以来の下司職の正当な継承者という自負があったのでしよう。

永徳3年（1383）、東寺の垂水庄一円支配を認める足利義満（写真2）の御教書（写真3）が出されました。足利義満は南北朝統一を果し、幕府成立直後から混乱していた政局をまとめたのですが、東寺の垂水庄支配に関しても明確な裁定を下しました。こうして、鎌倉時代の初め以来紛糾してきた下司職をめぐる問題が決着し、東寺の垂水庄一円支配が認められ、東寺による直務支配が進められることになったのです。

その後、芥河氏は、応安3年（1370）の古文書を最後に東寺関係文書にみられなくなり、垂水庄から手を引いたようです。北摂で地位と実力を誇っていた芥河氏ですが、応仁の乱（1467～78年）に巻き込まれ、その命脈が絶たれたと考えられています。また、吹田氏については、応仁の乱で芥河氏と行動をともし、応仁の乱に続く細川氏の内紛においては細川高国方について戦に加わっています。しかし、史料が断続的であるため、吹田氏の血脈が継続していたかどうかは不明です。

今回の展示では、東寺領垂水庄における芥河氏と吹田氏の活動を紹介します。

写真3 室町幕府御教書（京都府立総合資料館蔵）



室町幕府御教書

東寺雜掌申撰津国垂水庄

領家職事、重申扶具書如此、為一円

寺領之処、或号半済、或称下司職、

家人濫妨云々、不日止其妨、任先例、可

被至雜掌所務之扶、依仰執達

如件、

永徳三年十二月廿一日 左衛門佐（花押）

細河右京大夫殿

「仏像が語る歴史

—佐井寺所蔵の如来形立像—

平成12年10月21日から12月3日まで、博物館に寄贈・寄託された作品を紹介する「収蔵品展—受け継がれてきた吹田の文化財—」が開催されました。この展示で、展示室の冒頭を飾ったのが、痛々しい損傷をもちながらも古仏の荘重な雰囲気を伝える二体の仏像でした。いずれも市内佐井寺所蔵の仏像で、一体は平安時代初期の作とみられる地藏菩薩立像で、昭和45年に大阪府文化財に指定されています。もう一体は如来形立像（写真1）で、平安時代前期の作とみられますが、傷みが大きく、また尊名が不詳なことから、十分な検討や評価がされてきませんでした。ここでは、この如来形立像について考察してみたいと思います。

如来形立像は、現状で像高95.5cm、櫛材の

一木造りで、内削りはありません。体部は厚みのある力強い造形で、柔らかくあらわされた衣文の表現とあわせて10世紀頃の作と考えられます。面相部は磨滅しているため当初の容貌を知ることができず、また両臂先が失われて印相も不明ですが、上腕部の形から、右手は屈臂し、左手は前方にさげていたとみられます。頭部には肉髻があらわされており、衲衣をまとっていることから如来像であるとわかります。

保存状態は、面相部・両臂先ほか、両足先が失われ、現状では袈衣を台座に差し込んで立っています。像の前面は全体に黒褐色となり、特に胸から首にかけて焼損による炭化の痕跡が認められ、干割れが幾筋も走っています。焼損の激しい前面に比べ、背面は比較的良好に当初の状態を残しており、前方から火の手をうけたとみられます。また、頭頂部や両肩、裳裾には腐食がみられ、ある時期建物が雨漏りしたため、雨滴をうけた部分や床に近い像底部が朽損したものとみられます。こうした状態から、損傷は経年による自然損耗ではなく、火災と水損によるものと考えられます。それでは本像の本来の尊名は何であったのか、そしていつ頃、何故このような被害を受けたのかを考えてみたいと思います。

佐井寺は市内佐井寺1丁目に所在する真言宗の寺院で、元禄5年（1692）の『石川主殿知行所寺社吟味帳』の写しによれば、天平7年（736）、行基により十一面観音像を本尊とし、七堂伽藍をそなえた寺院として開創されたといわれています。山田寺と号し、かつては六坊の坊舎があったそうですが、中世に七堂伽藍と五坊が退転して無住の状態が続き、正保4年（1647）楽順が入寺して、観音堂と寺外の薬師堂、僧坊一字を建立し、再興したといわれています。また、佐井寺梵鐘の銘文では、楽順がこれら諸堂の再造を終えたのは慶安元年（1648）2月であったと伝えています。

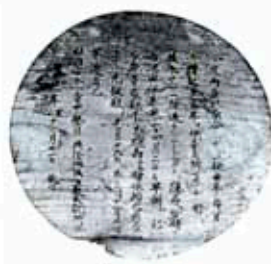
佐井寺が退転した背景には、室町時代後期にたびたび当地を巻き込んで繰り広げられた戦乱が大きな影をおとしていると考えられます。特に天文



写真1 如来形立像



(表)



(裏)

写真2 月輪板

元年（1532）から翌年にかけての室町幕府管領細川晴元の家臣池田・伊丹両氏と一向一揆の軍勢の衝突は、天文2年4月に佐井寺一帯を類焼するという惨禍をもたらしました。佐井寺所蔵の月輪板（写真2）の裏面には、この戦乱の状況と殿舎が類火炎上し、同年十一月に仮殿を造立、翌十二月廿一日に遷した経緯を記しています。このとき何を遷したか銘文は明記していませんが、月輪板表に薬師如来の種字を墨書していることから薬師如来像ではないかと考えられます。月輪板は、新造の仮殿に懸けられたとみられますが、これは本尊が何像であるか、種字によって明らかにしようとしたものと思われます。そして、この戦乱で罹災し、仮殿に遷された薬師如来像が、本如来形立像ではなかったかと考えられるのです。その理由は、現在佐井寺本堂には多くの仏像が安置され、そのなかには平安・鎌倉時代の仏像が幾体ありますが、如来形立像と地藏菩薩立像を除いては焼損の痕跡がみられず、両像はこれら諸像を祀る佐井寺境内の堂宇とは別の建物に祀られており、そのために戦火からの救出が遅れたのではないかと推測されるからです。そして地藏菩薩立像が、薬師如来でないことはあきらかですが、如来形立像は、造形的に薬師如来の可能性が考えられるからです。

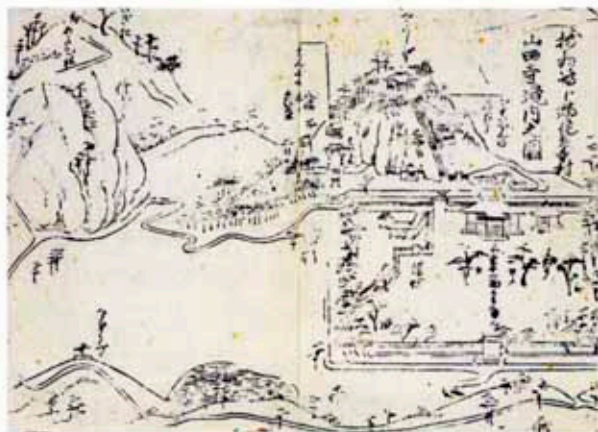


写真3 山田寺境内図

〔月輪板銘文〕

今度両屋形取合之中、一揆去年自八月
令蜂起、至当年、伊丹之城せめ候畢、時
後巻候而一揆追クツサレ、方々隠居、然時
自池田伊丹衆去四月一日之早朝、被
取懸、寺家地下悉撥向、時、依類火炎上候
者也、先仮殿、十一月廿六日取立、同十二月廿一日
奉遷者也、
社内安全 寺中繁昌 興隆仏法 五穀成就也、
天文二年癸巳十二月廿一日 敬白

それでは薬師如来像を祀った仮殿はどこにあったのでしょうか。殿というのは神社の建造物を意味し、仮殿が神社の管轄下にあったことを示唆します。これを傍証するのが、江戸時代に作られた「山田寺境内図」（写真3）で、これによれば、佐井寺境内の後方に山があり、西麓に鎮守社、山頂に薬師堂、南麓に地藏堂があったことがわかります。この山は春日明神・八幡神・牛頭天王を祀る鎮守社の境域で、楽順が慶安元年に寺外に再興した薬師堂はこの鎮守社の薬師堂とみられます。薬師堂は、その位置から佐井寺の奥の院であったと考えられ、天文2年に建立された仮殿がその後荒廃したため、同じ場所に楽順が再建したものと推測されます。鎮守社境域にあるとはいえ、もともと佐井寺の主要な堂宇であり、佐井寺は鎮守社と密接な関係をもっていたと考えられます。月輪板銘文末尾の「社内安全 寺中繁昌」という願文の一節からも、両者が一つの地域信仰の場として分かちがたく結びついていたことをうかがうことができます。

以上の考察から、本像は、鎮守社境域にあった佐井寺奥の院の本尊薬師如来立像である可能性が高いと思われます。そして本像の損傷は、天文2年の池田・伊丹両氏と一向一揆の軍勢の争闘による火災と、慶安元年に薬師堂が再興されるまでの間に受けた水損が大きな原因ではなかったかと考えられます。もちろんこれは一つの推論ですが、いずれにせよこれだけの損傷を帯びながらも、今日まで本像が守り伝えられてきたのは、人々の厚い信仰によるものであることは間違いありません。本像は、火災の惨禍とともに、人々の敬虔な心を今に語りついでいるといえるのではないのでしょうか。

『摂津名所図会』について



『摂津名所図会』「吹田渡口」(すいたのわたし)

この挿絵は『摂津名所図会』の「吹田渡口」(すいたのわたし)の場面です。この挿絵のおかげで吹田の渡しが人々によく知られるようになったといっても過言ではありません。というのは、『摂津名所図会』が江戸時代のベストセラーで、多くの名所図会のなかでも大変評判を呼んだ書物であったからです。吹田市立博物館では昨年、市民の植原正芳氏から『摂津名所図会』の初刷本一揃(12冊)をご寄贈いただきました。この初刷本は紙質も良く、刷りも鮮明で貴重なものです。この機会に『摂津名所図会』の初刷本と後刷本の相違を調べることとなりました。

『摂津名所図会』は摂津国12郡を対象地域とした絵入りの名所・旧跡記で、9巻12冊よりなります。著者は秋里籬島(舜福)で、挿絵は竹原春朝斎(信繁)を主筆として、丹羽桃溪(元国)以下7人が助筆しています。初刷本と後刷本の2種があり、初刷本は寛政8年(1796)に巻7武庫郡・菟原郡、巻8矢田部郡(上下2冊)、巻9有馬郡・能勢郡の4冊で、2年遅れた寛政10年に巻1住吉郡、巻2東生郡、巻3東生郡・西成郡、巻4大坂部(上下2冊)、巻5島下郡・島上郡、巻6豊島郡・河辺郡(上下2冊)の8冊が刊

行されています。なぜ2度に分けて出版され、しかも巻7から巻9という後半部分が先に発行されたのかについては疑問が残ります。そして、寛政10年に全巻揃ったところで、先に出版されていた後半部分の文章の訂正・改訂も行なわれたようです。(もしくはそれ以降の改訂)

初刷本と後刷本を比較してみると、多くの文章の訂正・改訂のほ

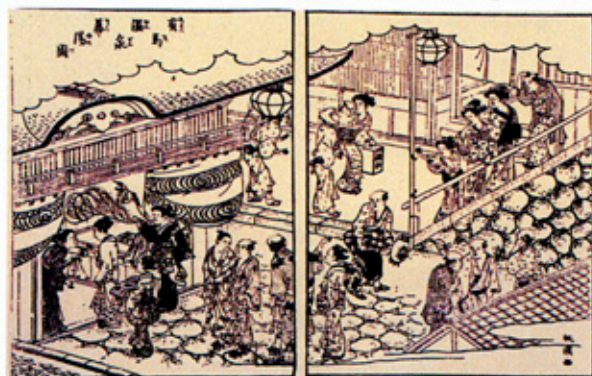
かに挿絵が差し替えられている箇所が9箇所あります。挿絵の変更は『京都書林仲間記録』の「済帳標目」(寛政十一歳次己未正月ヨリ五月迄)に、「摂津名所図会之内画面改め申された度き旨、吉為より口上書差出され候事」とあり、この時点の差し替えの可能性もあります。この挿絵の変更と担当した絵師について少し考えてみたいと思います。

『摂津名所図会』の凡例には「寺社の細画は竹原春朝斎の一筆なり。故に姓名印章なし。景物の画に至ってはしからず。因是画面に姓名印章をことごとくしるし侍る。」とあり、高い所から眺めた鳥瞰図的な名所風景の精緻な描写は竹原春朝斎が一手に担当して描いていることになります。そして、人物描写を多く含む風俗などを描いた挿絵はすべてに姓名印章を記すとしています。ところが風俗を描いた挿絵に姓名印章がなく、絵師が特定できない挿絵も若干あります。残念ながら巻5の「吹田渡口」の挿絵も姓名印章がありません。表1は各巻の挿絵の数と絵師を一覧にしたものです。この表から、先に出版された巻7から巻9(4冊)と、後に出版された巻1から巻6(8冊)とでは担当した絵師が大きく違っていることに気

付きます。名所風景は全巻を通して竹原春朝齋が描いています。一方、風俗画の方は初刷本（巻7以降）は7名の絵師が手分けして描いていますが、後刷本（巻1～巻6）は丹羽桃溪がほとんどを手掛けています。さらに、差し替えられた挿絵を見ると、9箇所とも丹羽桃溪のものと替えられていることがわかります。実際に差し替える前の挿絵と差し替えた桃溪の挿絵を見比べてみると、明らかに桃溪の挿絵の方が細かな描写に優れ、人物も多くその表情も豊かに描かれていると思われます。本を手にした人々がどちらの挿絵を喜ぶかは明白でしょう。ここに掲載した「有馬温泉幕湯図」の挿絵を比較しても、後刷本の桃溪の挿絵の方が画面いっぱいを使った力作という感じを受けます。他の挿絵を見てもこのような印象を与えたいと思います。『摂津名所図会』が評判のベストセラーになったひとつの要因は、竹原春朝齋が描くところの緻密な風景画と、丹羽桃溪の魅力ある風俗画のバランスにあったのではないかと想像できます。『摂津名所図会』の出版が逆転した経緯については諸説あり、大きく2つの推測が試みられています。ひとつは著者の立場からの考察で、秋里籬島が稿を重ねるうち次第に描写が細くなり内容も充実していき、後半部分の出来に比べて前半部分が簡略すぎて筆者の加筆・修正が必要となり、出版順序が逆になったのではないかというも



「有馬温泉幕湯図」(初刷本)



「有馬温泉幕湯図」(後刷本)

のです。もうひとつは出版元の事情から生じたものではないかという考察です。この説については詳しく述べる紙数はありませんが、出版元の実権が京都の吉野屋為八から大坂の柳原喜兵衛へ移っていく経緯の事情が一因となっているとされています。このことは『摂津名所図会』の発行がいかに大きな利権であるかを物語っています。また、『摂津名所図会』全巻刊行後に天満宮や座摩宮の記事の訂正が指示されていることや、他の名所旧跡記などが記事訂正のため出版許可に時間を要している事実から、記事の内容検討や訂正のため出版許可が変則的になったと推測されています。どちらの説も決定的な史料の裏付けはなく推測の域をでませんが、文章の改訂はもちろん、初刷本の挿絵を差し替えて後刷本の挿絵を充実させていることなどから、筆者の秋里籬島にしても、版元にしても、後刷本の内容をよりグレードの高いものにしたいという思いは共通していたのではないのでしょうか。

江戸時代後半数多く出版された名所・旧跡記の中でも『摂津名所図会』の評価は高く、当時の景観などを知るうえで利用価値の高い好史料といえます。当時の庶民はこの本を手にし、見知らぬ土地の風景や風物を楽しんでいたことでしょう。

	風景(竹原春朝齋)	風俗画	挿絵数
巻1	14	丹羽桃溪18 竹原春泉齋2	34
巻2	12	丹羽17 不明2	31
巻3	25	丹羽10 春泉齋5	40
巻4上	17	丹羽21	38
巻4下	7	丹羽18 不明2	27
巻5	20	不明7	27
巻6上	15	丹羽7 不明1	23
巻6下	21	丹羽3	24
巻7	17	石田友汀6 下河辺惟恵3 春泉齋2	28
巻7(後刷)	(17)	石田5 下河辺3 春泉齋2 丹羽1	(28)
巻8上	9	石田3 下河辺2 丹羽1 秀雪亭1 楠亭1	17
巻8上(後刷)	(9)	丹羽4 石田2 下河辺1 楠亭1	(17)
巻8下	14	石田4 春泉齋2 西村中和1 不明2	23
巻9	11	石田3 秀雪亭2 下河辺1 春泉齋1 不明3	21
巻9(後刷)	(11)	丹羽5 石田1 下河辺1 春泉齋1 不明2	(21)
挿絵数合計	182	丹羽95 (104) 石田16 (12) 春泉齋12 下河辺6 (5) 秀雪亭3 (0) 楠亭1 西村1 不明17 (16)	333

() 内は後刷り本の挿絵数
表1「摂津名所図会」挿絵数と絵師

催し物のご案内

展覧会

◆4月28日(土)～6月3日(日)

平成13年度特別展

東寺領垂水庄―悪党の時代―

休館日 5月1日・7日・14日・21日・28日

講演会

5月6日(日) 午後2時

「東寺領垂水庄の時空」

講師 帝塚山大学教授 小山靖憲氏

5月27日(日) 午後2時

「東寺百合文書の伝来とその意義」

講師 摂南大学名誉教授 上島有氏

*聴講無料・先着順120名

展示解説

5月12日(土) 午後2時

特別展示室 当館学芸員

*展示解説には観覧料が必要となります。

歴史講座

5月19日(土) 午後2時

「役行者と蔵王権現」 当館学芸員 滝沢幸恵

5月26日(土) 午後2時

「五反島遺跡と古代祭祀」 当館学芸員 高橋真希

6月2日(土) 午後2時

「摂津名所図会について」 当館学芸員 田口泰久

*聴講無料・先着順120名

利用案内

●開館時間 午前9時30分～午後5時

●休館日 月曜日と祝日の翌日

年末年始(12月28日～1月4日)

吹田市立博物館だより 第16号

平成13年3月31日発行

吹田市立博物館

〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL. (06)6338-5500 FAX. (06)6338-9886

展示トーク

当館学芸員が展示の解説や参加者の方々からのご質問にお答えします。

4月29日(日) 古墳時代の絵画土器

―垂水南遺跡― (高橋真希)

5月20日(日) 万国博覧会と吹田 (田口泰久)

6月17日(日) 変化観音像について(滝沢幸恵)

7月15日(日) 摂津国垂水荘図と榎木慶徳
(望月直子)

8月19日(日) 次田堀川・垂水布施屋について
(望月直子)

9月30日(日) 金子雪操と吹田 (滝沢幸恵)

*4月29日と5月20日には特別展の展示解説も併せて行います。

*展示トークには観覧料が必要となります。

交通案内

●JR岸辺駅下車徒歩25分

●JR吹田駅・阪急吹田駅から

桃山台駅前ゆき、山田樫切山ゆきバス

「佐井寺北」下車徒歩10分

千里中央ゆき、阪急山田ゆきバス

「岸部」下車徒歩10分

●JR吹田北口から

五月が丘南ゆきバス

「五月が丘西」下車徒歩7分

●阪急南千里駅から

JR吹田ゆきバス②、③系統

「佐井寺北」下車徒歩10分

